

STRANGE FOLK

KULA SHAKER FANZINE

ISSUE NO.1

ライブレポート

ミルトン・キーンズ、キングス・カレッジ・ロンドン

クリスピアン、アロンザ、ポールへの

独占インタビュー！

機材紹介

PART 1 : PAUL'S DRUMKIT

The Return Of The King

SING-ALONG-SONGS BY
The Magic Bullet Band

Hello and welcome

Kula Shakerのプレミアム・オンライン・ファンジン「ストレンジ・フォーク」第一号へようこそ!

ここは、あなたのKulaに対するすべてのニーズのためにあるワン・ストップ・ショップ。

そう、信じられないことが起こった。2005年末にJay Darlingtonを除いたメンバーで、**Kula Shakerが再結成した!** (ヒゲがないバンドになったのは残念!)

このファンジンは、Kula Shakerを大好きな仲間がたくさんいることに気付いたDanielとAndreaによって始められました。バンドと知り合いか、もしくは、身体に悪いくらい長時間オフィシャルサイトのメッセージボードを徘徊したりしない限り、ほとんどの情報を逃してしまう。だから、Kulaに関するすべてのことを提供することにし、たくさんの面白い話を集めました。レビューやニュース、噂、ディスコグラフィー、更にはCrispian、Paul、Alonzaへの**独占**インタビューまで、すべて掲載してあります (新メンバーのHarryのインタビューを含め、インタビューはまだ続きます)。

面白い情報がそろったら、すぐに次号を発行する予定です。次号では、Danによる、Kulaの狂気のグルであり指導者でもあるDon Peckerの独占インタビュー等を掲載します。それはキングストンで彼に会うチャンスがあったことで行われたものです (これは彼にとってキングストンでの二度目の路上パフォーマンスでした。一度目は、1995年にまだ駆け出しのKula Shakerと共にショッピングセンターの裏で行われました)。Donは、Kulaにまつわる話からあまりKulaに関係ないことまで、多数のDanのインタビューに応じてくれました。

情報ルートにはたくさんの面白い物があるので、引き続き注目して下さいね。その時まで、このささやかなクーラ・コレクションの第一号を楽しんで下さい!

Daniel & Andrea



もし寄稿したいと思ったなら、遠慮なく連絡してくださいね!

※ストレンジ・フォークのメーリングリスト (英語) はこちら:

<http://launch.groups.yahoo.com/group/StrangeFolkZine/>

※このオンラインファンジンは **<http://www.kulashaker.net>** から発行されています。

Contents

- 2 あいさつ
- 3 目次
- 4 噂&ニュース
- 5 ミルトン・キーンズ ライブレポ
- 8 新聞記事「再結成」
- 9 EP『Revenge Of The King』レビュー
- 12 ロンドン、キングス・カレッジ ライブレポ
- 16 The Magic Bullet Band
- 17 UK版 完全ディスコグラフィ
- 19 機材紹介: PAUL'S DRUMKIT
- 22 Crispian、Alonza、Paulへのインタビュー
- 26 過去記事から: 「Q」誌 1999年3月号
- 30 イラスト: Clare画



Editors:

Andrea Zachrau (hosannah@t-online.de) + photos
Daniel S. Taylor-Lind (smokinmojo@hotmail.com)

With contributions from:

Anni Kotisalo (purpley_k@hotmail.com) - layout and design
Clare (hippypixie@ntlworld.com) - Kula artwork
Dan Staples (daniel@fobbedoff.net) - cover photo
Yam (MusicalElitist1@aol.com) - Paul's equipment + photos
Susheel Kumar (kuladudek@hotmail.com) - newspaper scans
Mark - Milton Keynes photo

Translated into Japanese:

Mayuko (my24ks@yahoo.co.jp)
Mizuho (ruisui0810@yahoo.co.jp)

※訳者より:これは、オリジナル版発行者であるAndreaさんの許可を得て和訳してあります。また、原文中のスラング、ジョークは上手く訳せていない／訳していない箇所があります。読み苦しいところがあるかと思いますが、訳者は英語上級者ではありませんのでお許しください。(英語が読める方は、オリジナルの英語版を読むことをおすすめします!)

掲載されている内容(特にイラストと写真)の引用に関しては、発行者の了解を得た上で、必ず参照先を明記してください!

噂 & ニュース

EP『Revenge Of The King』は4日間でレコーディングされ、その後、ロンドンのどこかのガレージでミックスした、とPaulが言っていました。

最新EPの表題曲である「Revenge Of The King」は、おそらくMedieval Baebes（Alonzaはその中の一人と結婚しています!）のメンバーとの共作ではないかと言われていましたが、ただの噂に過ぎないと判明。

Kula Shakerは明らかにあと6曲ほどレコーディング用の楽曲を用意しています。まだレコード会社は決まっていますが……。

Kulaが公式の復活公演の日に幸先よく選んだのは3月11日だった!（びっくり……）

EP『Revenge Of The King』がついに限定版のレコード盤で発売されましたが、1ポンドで販売されたThe Jeevasの「Scary Parents」の7インチレコードは、今や14ポンドの価値があるので、出来ることなら2枚買おう。

Kula Shakerは、この夏、「T in the Park」と「VFestival」の2つのフェスティバルに出演する予定で、すべてが上手く行けば、秋にはUK以外のヨーロッパでもツアーを行うつもり。
[Crispian談]

再結成ツアーには本当にツアークルーがいないので、Paulは「全然気にしてないよ」と言いながら、自分でドラムキットをセッティングしています。ただ一人、まだ機材テクを持っているのはCrispianだけ（去年もCrispianを担当していたSimonのこと）

ここ最近の2つのツアーで、BuckyのメンバーであるSimon（いいヤツだよ）はギターテクからツアーマネージャーに昇格。「何で彼らはオレにそれが出来るって思ったのか分からないよ」とSimon。

Jayがバンドに戻って来ないのは、それぞれの奥さんが仲良くないから（「Footballers Wives」（※注：イギリスのテレビドラマ）みたいなんだろうか）。彼は（再結成に）興味があることを示して、バンドと連絡を取り続けてはいるんだけど。

新しいキーボードプレイヤーはHenryといいますが、バンドは彼をHarryと呼びます。彼はフルネームを教えてくれたけど、ダブルネームだったから忘れちゃった（Crispianのインタビューを見てね）。

Don PeckerはCrispianにゴルフを教え続けていて、Don曰く「あのヤロー対抗意識を持って来やがって、こないだは負けちゃったよ」だって。

余談：Crispianにギターを教えたのはDon Peckerでした。

Paulは「Sound Of Drums」は好きじゃないんだって。ドラムパートが好きじゃないそうです。「レコーディングの後、僕らはあの曲に納得してなかったんだ。時間もお金もかかり過ぎたしね」

Paulはこの7年間、Thirteen:13というバンドで活動していました。また、ロンドンの小さなクラブで活動していたカムデンを拠点としたインディーズバンド、Zero Point Fieldのメンバーでもありました。

Paulは実際にロンドンバスのドライバーになるためのテストを受けたのですが、言うまでもなく惨めな結果に終わりました。（Kula Shakerが名声を得る以前の、ずっと昔の話です）

Crispianは、ずっと、Don Pecker（音楽活動上の名前はHobby Horse）と控え目なアコースティックデートをしています。一緒に路上ライブもしたんですよ!

The Jeevasの前にレコーディングした、ネット上に漂っているCrispianのソロアルバムは、私の考えでは、すぐに広範囲に流出したのでしょうか。（私がそう言っているだけだけどね!）

ああ、それと、皆が好きなこの手の話、ミルズ家のちょっとしたトリビアなんだけど、60年代のUKバンド、Small Facesが、ビリヤードのことをスラングで“Hayleys”ってよんでいたんだよ（※注：Crispianのお母さんの名前がHayley Mills）。

どうやらCrispianは、以前、無料で菓子を貰うために、ラウンタリー社に菓子の品質を褒め讃える手紙を書いていたらいい（そして上手く行った）。

そして最後は、1996年のCrispianの発言。「もしキミの母親がキミのバンドを好きになり始めたら、それはステージの上でヤギとやり始める時だぜ」

Collected by: Daniel and Andrea



ミルトン・キーンズでの復活

「銀河中のすべてのロックンロールの中核だ」(Crispian Mills)

知らない人のために書くと、ミルトン・キーンズは、1960年代にイングランド中央部に特設された都市だ(ハリー・ポッターやリトル・ウィンジングを思い描いて)。誰に聞かによろが、この街(の都市設計)は、悪趣味な計画によるものか、皮肉なポストモダニズムの声明かのどちらかだ。

言うまでもないが、The Style Councilはそれについて「Come to Milton Keynes」という曲を書いている。

*"May I slash my wrists tonight,
On this fine conservative night tonight
I was looking for a job so I came to town
I easily adopt when the chips are down
I read the ad about the private schemes
I liked the idea but now I'm no so Keyne"*

とにかく、ここはKula Shakerに再生の地に選ばれた場所なんだ！

だから僕は相当早起きして、いつもの時間をサイケデリックな王の特権でねじ曲げてめかし込み、Kula Shakerの復活ギグのためにミルトン・キーンズ行きの列車に乗り込んだ(彼らはクリスマス前にレイトン・バザードでギグを行っているけど、今回ののは公式なギグなんだ)。

そして会場はミルトン・キーンズのスノードームで、誰も触れないかもしれないので書いておくと、すごいカフェの中にあつたんだ。かなり早く着いたから、会場の外に『K』(去年Jayにサインを貰った)のレコードを持って座り込んだ。僕はなんとかバンドメンバー全員に会ったから、今や『K』には全員のサインが入ってる。伝説的なDon Pecker、典型的な年老いたヒッピー(そして僕が育ったデヴォンからちょっと行った通りに住んでる)にも会ったんだ。彼はバンドの「狂気のグル」で、Kulaのことを長いこと知っている。情報の宝庫で、中でも、彼(Don)とCrispianがまだ路上でライブを行っていることや、一緒に控え目ないくつかのアカースティックギグを

やったことを教えてくれた。

その後、ウェザースプーンズ（※注：イギリスのパブのチェーン店）に素早くビールを一杯飲みに行って、また会場に戻った。カフェの後ろはカーテンで覆われていたけど、大きな穴があいていたので何とかサウンドチェックをキャッチした。そして、ホントに格好いいインストバージョンの「Super CB Operator」と、数回の「Revenge Of The King」のリハーサルを何とか聞くことが出来た。「Revenge Of The King」にはイカした代替の歌詞があって、サビの部分は、Fred MurrayとRobert Percy Weston（Herman's Hermitsで有名）が書いた「I'm Henry 8th」という1911年にミュージックホールでよく流れていた曲から引用されて面白かったよ。

それから列に並んで入場し、最前列にいい場所を確保して、耐え難い4時間もの間、偉大なShakerの登場を待った。サポートバンドは最悪だった。本当にひどかった。Zero Point Fieldは別だけど（Thirteen:13が解散した後にPaulがドラムを叩いていたバンド（※注：現在は別ドラマーで活動中で、この日のギグのサポートバンドの一つとして参加している））。彼らはホントに良かったし凄く格好良かったよ、たとえボーカルがちょっと不機嫌だったとしてもね！

そしてそれからステージは片付けられて、年配のギターテクが、アンプからエフェクトペダルに伸びるとも長いギターコードをステージ床に貼り付けて、短いコードをエフェクターの正面からギターに繋ぐのを見た！ 次に、お香が焚かれ、Don Peckerがブラブラ歩いて来て「彼らの名前は何だ、彼らの名前は！」と観客に叫んだ。ヒンドゥー教寺院での信心深い光景のように、観客は熱狂し、答えた。そして20時10分、偉大なShakerがステージに登場した。

彼らはプラグを繋いで、Crispianはゆっくりとコードのかたまりをかき鳴らしながら客席フロアを見渡した。曲のテンポが速くなるにつれて観客はそろって息を止め、Crispianはゆっくりと頭を上げて、コードは「Knight On The Town」に変化した。観客は歓声を上げ、Kula Shakerの残りのメンバーはCrispianの背後で激しく演奏していて、今死んだら幸せなんじゃないかのように見える！

新メンバーのハモンドオルガンのHarryは上手く調和していた（彼はJayではないけど、ビゲと踏み台とビンテージデニムがオルガンの後方に見られなくなっている）。Crispianが何箇所か間違えたとしても、それは素晴らしい曲で、良い幕開けだった。MCは面白くて、CrispianはKula Shaker再結成の理由として「僕らはまた世界を救わなきゃならないから、“The Bat Phone”（※注：バットマンと連絡を取るための直通電話）に呼び掛けるんだ！」って言ってた。バンドはとても軽快で、Paulはドラムキットの後ろで笑っていた。ステージ上の彼らはちょっとナーバスな印象を受けたけど、僕は、彼らがまだ素晴らしいバンドであることが、ただとても嬉しかった。90年代のたくさんのバンドは二流になってもまだ続けているからね（何で最高のバンドは最低になっちゃうんだろう!）。

それから「Big Bad Wolf」が始まった。おそらく、僕が最も好きじゃない新曲だろう。歌詞は凄いいんだけど。例えば「how can you be right when you're so wrong」とか。僕はこれが彼らの6年振りの初めての公式ギグだということを忘れていたと思うんだ（約2年前、Jayを除いたメンバー全員で、パーティーと一緒にジャムってたって聞いたことは覚えてるよ）、でもこれは彼らの告知された初めてのギグだったんだ！

とにかくエネルギーがあって、凄く興奮させる何だかよくわからない鋭さがあったんだ。すべての新曲の中で一番昔のKula Shakerっぽかったのは、実際、渦巻くハモンドのラインがある「Dictator Of The Free World」だった。皆が初めてその曲を聴いた時は激しい批判が多かったけどね。「Shower Your Love」をやったのには驚いた！ それは1994年頃にロンドンのハイゲイトで書かれたものなんだよ。よりロックで、過去の偉大なブリットポップのアンセムにより近い。

それから彼らは「Last Farewell」をやったんだけど、彼らには他にたくさんやれる曲があるのにその曲をやったことに本当に驚いた。

「Tattva」は良かったけど、期待してたほどミステリアスではなかった。そしてそれは次第に「6ft Down」に変化した。

僕の愚見では、それは新しいKulaの曲の中で最強の曲だと思うんだ。「自分自身の死を経験するために生きている」という歌を生み出して、そのテーマをショッピングセンターに設定できるのはMills氏だけだろう!

予想通り、観客は「Hush」が始まると熱狂した。それは今までにないほど素晴らしかったし、「Hey Dude」もまたウケが良かった。

Crispianがどんなに素晴らしいスライドギタープレイヤーか、僕はいつも驚いている。無限の力を持つ「Govinda」に近づくと、彼らは別の新曲を何とかその前にねじ込んだ。「Govinda」がライブで見れるとは思いませんでしたので、不思議な感じがした。それは、凄く昔の曲だけど、今までよりも強力で、今聴いてもまだ背筋がぞくぞくする曲だった。「Grateful When You're Dead」をやらなかったことにも驚いたな、それはいつもウケがいいのに!

ギグの見どころはミュージシャン間の相互作用を見ることで、それはAlonzaとPaulは不可欠だってことを思い出させた! 人々は、Crispianがボーカル兼ギタリストで、言うまでもなく多くのサウンドに責任を負っていることからCrispianにばかり焦点を当てがちだけど、AlonzaとPaulなしではKula Shakerはなかつただろう。JayなしでもKulaじゃないとも言える。Jayは鍵盤の上で吹雪に吹かれていた悪の魔術師だったからね。だからそれは、プログレッシブ・ロックが差し引かれてよりロックになったってことだ(それが良いことかなの悪いことなのかどうか、意見を聞く余地はあるね)。

僕はHarryが場違いだとは思わないが、彼らが演奏できる曲が減ったのは確かだ。Kulaはたった2枚のアルバムしかリリースしていないけど、演れる曲はたくさんある。Harryはその中のたった数曲しか弾けないんだから。

結論として、新しい曲はどれも良かった、本当に良かった、実際めちゃくちゃ良かった。バンドとしてはまとまっていない印象を受けたけど(The Jeevasはすごくしっかりしてたし、98年のKulaもそうだった)、これは最初の公式ギグだから、これから、4年間ツアーをし続けていた解散前と比べても、バンドとしてまとまっていくだろうと確信している。

復活ギグは本当に成功だった。僕は、たとえ彼らが「Sound Of Drums」をやらなかったとしても、誰もがっかりして去っていくとは思わない(※注:この日のライブで観客の一人が「Sound Of Drums」をリクエストしたところ、Crispianがその曲は復習してないから今日はやれないんだと答えていることから、このような喩えになっていると思われる)。ロックの魂が、体の振動が、神秘的な戦士が、永遠にKula Shakerを飲み込もうとしたどん底の霧の中から帰ってきたことが、ただ嬉しいだけだ。

SETLIST

1. Knight on the Town
2. Big Bad Wolf
3. Revenge of the King
4. 303
5. Die for Love
6. Diktator of the Free World
7. Shower Your Love
8. Last Farewell
9. Tattva
10. 6ft Down
11. Hush
12. Hey Dude
13. Super CB Operator
14. Govinda

The Reunion



ROCK star Crispian Mills has reformed Kula Shaker – six years after walking out.

I can reveal the group will release a free download EP, Diktator Of The Free World, and play live in Scotland next month.

The surprise reunion sees the singer back with original members Alonza Bevan (bass) and Paul Winterhart (drums).

Crispian told me: "Kula Shaker is like a marriage."

"It's a long-term relationship. There was a separation but now we're back together."

"The band remains a big part of my life. We never stopped talking."

"A year ago, I started writing with Alonza, who was playing with former Smiths guitarist Johnny Marr."

In 1996, Kula Shaker – who take their name from a ninth century Indian king – exploded on to the UK rock scene.

Their debut album K hit



Huge hit: Crispian Mills

No. 1 and sold in excess of one million copies.

The group notched up a string of eight hit singles including Tattva, Hey Dude, Govinda and Hush, a cover of the classic Joe South song.

They supported Oasis at Knebworth and the following year won Best Newcomers at the Brits.

Their 1998 album *Peasants Pigs And Astronauts* was also a hit – then Crispian quit.

He said: "The pressure of people making money out of us took the thrill out of it. The new material has the same vibe and energy but the songs have sharper teeth."

●To find out more about the band check out

ロックスター、Crispian Mills が Kula Shaker を再結成。(脱退から6年)

彼らはフリーダウンロードEP『Diktator Of The Free World』をリリースし、来月、スコットランドでライブを行う。この驚きの再結成は、このシンガーと、オリジナルメンバーのAlonza (bass)、Paul (drums) も一緒だというのがわかった。

Crispianはこう話す。「Kula Shakerとは結婚のようなもの。長い付き合いさ。距離はあったけれど、また一緒に戻ってきた。Kulaは僕の人生の中で多くを占めているんだ。僕はずっと話し続けていたよ。そして1年前、Alonzaと曲を書き始めたんだ。彼はその頃、The Smithsのギタリストだった、Johnny Marrのバンドにいたんだけどね。」

1996年、(9世紀のインドの王様の名前からとったという) Kula Shakerは、UKロックシーンにおいて爆発的にヒット、デビューアルバム『K』はチャートNo.1となり、100万枚を超えるセールスを記録。Tattva、Hey Dude、Govinda、そしてHush (Joe Southのカバー)を含む8枚のシングルヒットを連発した。

ネブワースでのOasisのライブのサポートアクトを勤め、その年のブリットアワード最優秀新人賞を獲得。

1998年リリースのアルバム『Peasants, Pigs & Astronauts』もヒットしたが、まもなくしてCrispianが脱退。

「僕らが金儲けする人間達からのプレッシャーで、音楽をすることが楽しくなくなってしまったんだ。新しいものを作り出すには皆さんのエネルギーがいるからね」

(Crispian)

今後もさらに注目だ。



10年前、Kula ShakerはスコットランドでのT in the Parkのトリを勤めたことから、彼らのキャリアをスタートさせた。ここに独占的に彼らの復活をお知らせしよう。シンガーCrispian Mills、正真正銘、彼のバンドが7月8日、T in the ParkのKing Tut's ステージに帰って来る。「スコットランドのオーディエンスは世界で一番騒々しいよ。宇宙から万里の長城が見えても、T in the Parkのオーディエンスの歓声が聞こえても、僕は驚かないよ」(Crispian)

Kula Shakerの雑誌・新聞記事を見かけましたら、スキャンしてぜひ私達宛にお送りください！次号 Strange Folk へ掲載いたします。(編)

Revenge of the King EP

私は6年間、この時を待っていました。数分もしたら、またこの曲たちを聞き返すのでしょう。そう、たった今、Kula Shaker復活EPをダウンロードしたところです。新品のCDを店で買って、ブックレットをめくりながらキレイにデザインされたCDをプレイヤーに入れて、ただ座って楽しもうとしてるのは違うけど、気にしないわ。そんなこと気にするはずがない！

私はコンピューターの前に座り、曲名をスクロールした。1曲目の「Revenge of the King」が流れてくる。そして私はつぶやく。「これだ」これが、他のバンドからは得られなかった、長年待ち望んだもの。Crispianの声、そしてとても馴染み深いKulaサウンド…そう、以前とは違うけれど、これはついにKula Shakerなのだ。私はただ聞き入るだけで、まったく動けなかった。まるでCrispianが私に話しかけているよう！

「Revenge of the King」は、あっという間に私を支配した。やった！これは現実なのだ。「この時をずっと待ってたんだ…」ついに“王の逆襲”が始まる！それは明らかに、終わったところから始まっているんじゃない。すべてが発展し続けてたような気がする。Kulaが最後に一緒に活動してから6年、そして、新曲はより政治的で批判的だと感じられるだろう。でもそれも悪くない。

「Dictator of the Free World」は、傑出した楽曲。私はブッシュ大統領のことはうまく説明できないけれど…“I'm a dic(k) I'm a dic(k) I'm a dictator”、この箇所が頭から離れない(※注:dickはスラングで、この場合は「バカ」という意味だと思われる)。そんなフレーズが頭の中で流れ続けるなんて滅多にない経験だわ。

「Troubadour」は、今回のEPの中で最も心に届く曲ではないでしょうか。面白いことに、Crispianが“僕のお人形、やさしくて(Doll, be kind)”と歌うのに微笑んでしまった。彼は誰かを“お人形(Doll)”と呼ぶのでしょうか。耳慣れないけれど、しかしこの曲には合っているように思う。馬の比喩表現もシャレが利いていて面白い。切なくて、しかしとても温かい。最初にリピートするのはこの曲になりそう。



「Six Feet Down」は、洗練された曲。何故だかはわからないけれど、「Revenge of the King」と似た印象を受けた。ギターリフはグルーヴし、ハンドクラップがとても利いている。マントラもなければ、インディアンフルートの音色も聞こえない、クリシュナの表現もどこにもない。他のKulaの曲とはかけ離れた曲である。

このEPは、この長い間での私にとってのベストチューン。もっと新曲が聞きたい！だからどうか、今度こそずっと続けて貰えませんか？あとたった一枚のアルバムだけ？本当に、一生のお願い！

Lyrics

Revenge of the King

Freedom, spring has come
Healing everyone
God bless the King

Brothers gather around, get ready to sing
We been waiting so long
Revenge of the King

The oil has run dry
The great seas did rise
And the water ran under your door
Everybody knows there'll be more

Freedom, tears of joy
Weeping, love of God
God bless the King

Brothers gather around, get ready to sing
See the demons afraid
Revenge of the King

There's a breed of man
With blood upon his hands
He was crazy since the day he was born
But we don't have to fear them anymore

Say I don't want to die like a rat on a ship
I don't want to die for somebody's kicks
Give me some fire
In my hand
I'm just a loser but
I'm going to make a stand

Freedom, tears of joy
Weeping, love of God
God bless the King

Dictator of the free World

I'm a killer, I'm a digger in the Arctic lands,
Who cares about the weather
When you're as rich as I am,
I'm making waves... baby, cos Jesus saves!

People say are you crazy I say wow!
I'm going to send you ass to Guantanamo
No one else is quite as rich as me
Or does as much for charity

I'm a Dic, I'm a Dic, I'm a Dic, and I'm a
Dictator
Dictator of the free world – a c'mon!

Let us pray
God is with us on our side
Who cares if coloured people die!
Hell, I'm so good at making friends
I tell you know... that this is the end!

I'm a Dic, I'm a Dic, I'm a Dic, and I'm a
Dictator
Dictator of the free world – a c'mon!

I'm an A1 major league Sociopath
My Daddy's in oil and my life is a gas
It's good to be King
Oh yeah... let choirs sing out, sing out!

I cut my foes and my enemies down
I blew up their homes and their towns
No one is as powerful as me, enthroned in
popularity

I'm a Dic, I'm a Dic, I'm a Dic, and I'm a
Dictator
Dictator of the free world – a c'mon!

Lyrics (continued)

Troubadour

I'm dreaming of your brazen arms again
Your skin that's softer than snow
Keeps my darkness company
I swear that I'll never let go

Girl is kind, be mine,
Let me be your troubadour
I don't deny, I can't sing and I'm poor
You make a liar, you make a cheat
You make a prince out the poet in me

I see two wild horses by a stream
Heading for the old country
A voice says "boy it's all in your head"
It seems pretty real to me

Girl be kind, be mine,
Let me be your troubadour
Let me be your troubadour
I don't deny, I can't sing and I'm poor
You make a liar, you make a cheat
You make a prince out the poet in me
A Troubadour

My love, my muse
Come with me
Cast out from the world we know
Eastward bound
Out in the sea
Our fortune awaits us there
Our fortune awaits us there

Doll, be kind, and be fine,
Let me be your troubadour
I don't deny, I can't sing and I'm poor
You make a liar, you make a cheat
You make a prince out the poet in me
A Troubadour

Six Feet Down

I am six feet down in an open grave
Living dead shuffling through my brain
In a shopping mall, or a multiplex
All I see is the presence of death

Don't ask me
To the party tonight
I'd bum you out,
Yeah I'd spin you out, oh woe

I'm six feet down in an open grave
Thinking bout all the mess I made
In my world of pain, but I'm all alone
I can bear a voice, but I'm all alone
Oh my, I need the magical seed
That's the sound of love coming to rescue me
Coming' to rescue me
A love to rescue me

Oh my Jesus, you can heal the blind
Oh my Jesus, I'm similar kind,
Oh my Jesus, can you spare some time at all

Oh my Jesus come and rescues me
Oh my Jesus come and rescues me
I'm six feet down whets become of me
Oh my Jesus, come and rescue me

Well I'm six feet down
At the end of the line
I've got no shoes
I got no time
But thank you Lord,
For laying me here,
For the end is nigh
And I feel no fear

All songs written by Mills/Bevan

Deaf in London

偉大な Kula Shaker が 1999 年以来初めてロンドン市街へ



なんて素晴らしい日！ 私とボーイフレンドのSebastianがドイツからKula Shakerのギグを見にロンドンに行くなんて、皆、クレイジーだと思うでしょうね……でも再結成まで6年も待ってたんだから、行かなくっちゃ！

私たちはロンドンで他にすることがなかったから、午後2時頃に会場に行ったの。バンドが会場に着いた時に見れるかもしれないと思って。正直言って、待つことには本当に退屈しちゃってたから30分後にそこを離れて、それからYamに会ったの。Kulaについてあれこれ楽しくお喋りしたり話したりしたわ。

それからちょっとして小さな白いバンが到着して、Paulが降りて来た！ 素敵！ Peasants, Pigs & Astronautsのブックレットにサインを貰って（99年にJayだけにサインを貰ってあったから、Paulはちょっとイライラしてた）、一緒に写真を撮ったの。彼、私のバッグ（☸の印入り）を凄く気に入って、Black Rebel Motorcycle Club（※注：アメリカのバンド）も私たちの会話に一役かってくれた（「僕の奥さんもB.R.M.C.が好きなんだ」だって）。

Paulはちょっとして戻って来て、また話をしたの。Jane's AddictionのドラマーのStephan Perkinsの家でマリファナを吸った、いくつかの奇妙な話をしてくれたわ。それから私の彼がとんでもないことをPaulに頼んだの、もし出来たらサウンドチェックを見せてくれないか、って。そしたらPaul、見せてくれるって！

それで私たちは2階へ行って、Paulと何人かのクルーが楽器を準備するのを見て、やる事がなくなってこっちに戻って来たPaulとまた1時間ほど話したの。PaulとYamはドラムについて凄くいい話をしてたと思うんだけど、正直、まったくわからなかった。でもPaulは、新しいEPのレコーディングの話や、いかにJeevasの状況が上手く行かなかったかについても話してくれたわ（PaulがJeevasについて話してくれたことの一つが「彼ら、オレとAlonzaより髪が多いかもなあ」……）。Kulaの今後については、「どうなっていくか、様子を見るよ」とだけ。彼ら、レコーディング用の曲が6曲用意出来てるのに、まだレコード会社が決まってないから。

少ししてCrispianとAlonzaも到着して、サウンドチェックが始まった。私はただ呆然としてそこに座ってた。ホントに彼らがステージに立ってるってことが信じられなかった。突然、なんでKulaが常に私の大好きなバンドでい続けるのか、生身の彼らを見て思い出した。彼らのライブを見るのは凄く幻想的だったから！ 4曲ほどリハーサルをした。うち2曲は「Revenge Of The King」と「6ft Down」で、1曲は「Die For Love」という、まだ聴いたことがない曲だった。

Crispianはあまり機嫌が良さそうじゃなくて、ちょっと調子が悪そうで、音響さんにちょっとイライラしてるようだった。でもその後、私はCrispianと話せたの。2～3年前に私がインドのバッジをあげたことを覚えててくれて、まだ持っていて、赤いドラゴンのギターに付けてるのを見せてくれた。ドイツからわざわざ来たことに感謝してくれて、イギリスでの状況を確認して、それから秋にはヨーロッパツアーに出たい。その前に、イギリスのフェスティバルに出るんだ、って言ってた。

6時半に開場して、何とか2列目にステージがよく見えるいい場所を取れた。サウンドチェックの時にみただけだった

けど、本当にThe Magic Bullet Bandが気に入ってしまったの。Andyはギグの間中ずっと笑顔で、観客と同じくらい楽しんでるみたいだったわ。

それからKulaが登場した。その時点で会場は満員になって、皆狂ったように歓声を上げ続けてた。Crispianは「やあ、ロンドン！ ロンドン！」と観客に挨拶。彼はこの街でまたギグをやれるのが本当に嬉しそうだった。そしてギターを持って、「Knight On The Town」のイントロを弾き始めた。これがどれだけ恋しかったか！ 最初にどこを見たらいいのか決め兼ねて、まずCrispian、それからPaul、Alonza、そしてまたCrispianを見た。思わず本当に彼らがまた一緒にステージに立ってることを確かめてしまった！ 私、きっと最初のコードが鳴った時からバカみたいに笑ってたに違いないわ、でもそんなことどうでもいい！ 新曲の一つの「Big Bad Wolf」に入る前、Crispianが「楽屋で書いたばかりの曲をいくつかやるよ、すべてが予定どおりに行くといいんだけど。じゃあ一緒に盛り上がりよう！」と言うのを聞いて、最初の一秒ですっかりのめり込んだ！



ゾクゾクするクラシカルなイントロで、今までと同じように素晴らしくて、初めてKulaを見る観客を生き活きと踊らせた（または、ただただ高くジャンプさせた）凄く刺激的な「303」の後、もう1曲、楽屋作の曲「Die For Love」を聴けた。はっきり言って私のお気に入りじゃないけど、凄くライブ映える曲だった。他の新曲は「Dictator Of The Free World」（“すべての自由人と、世界中の支配者への指令”）、「6ft Down」と「Super CB Operato」（グルーヴィー！）。正直、どれが一番好きかは選べないわ。いつもやってる昔からある曲だと「Grateful When You're Dead」、ギターリフが本当に大好きなの！ もちろん「Tattva」もね。「Shower Your Love」は大好きだったわけじゃないけど、新しいバージョンは素晴らしかったことを認めなくっちゃいけない。「Hush」と「Hey Dude」での観客の熱狂振りは別格だった！

いつものCrispianなことだけど、彼、音響さんにかなりムカついてたみたい。「ヤツはホント脳天気だよ」、「音を立てずに手で合図するんだ。彼はとても耳が遠いからね」だって。ナイスな皮肉！ 決して満足出来ない人ね、Millsさん？ 私の愚見では、正直、音には何も問題がないようだったけど……。とにかく、彼はちょっと調子が悪くてSimonがちょくちょく何か薬（喉の薬だと思う）を渡して中断したにせよ、Crispianは心からギグを楽しんでるようで、客席に向かって親指を立ててみせた。同じことがPaulにも言えるわ、彼、ギグの間中ずっと笑顔だった！ オルガンの後ろに毛むくじゃらの人がいないのは不思議な感じがしたけど、Harryはよく合ってると思った。ただ、Alonzaはちょっと疲れてたようで、笑顔は見れなかった。

コードが「Govinda」に変わって、観客は熱狂した。その時点で、私はギグが終わりを迎えたことが分かったけど、そんな悲しい気持ちは歌が始まるとすぐに飛び去った。私はただそこに立って、何も魔力を失ってない個々の曲すべてを楽しんでいた！ 伝統的なエンディング。本当に素晴らしい！ ありがとう Kula！



SETLIST

1. Knight On The Town
2. The Big Bad Wolf
3. Revenge Of The King
4. 303
5. Die For Love
6. Dictator Of The Free World
7. Grateful When You're Dead
8. Last Farewell
9. Shower Your Love
10. Tattva
11. 6ft Down
12. Hush
13. Super CB Operator
14. Hey Dude
15. Hollow Man (Part II)
16. Govinda

一緒に歌うのにぴったりな楽曲

多くの場合、サポートバンドは最悪か、メインのバンドよりもずっといい。そして彼らは、まんまと観客を楽しそうに微笑ませ、偉大な Shaker の登場へ向けての場を整えた。これが、Kula の最近の2つのツアーで、The Magic Bullet Band (以下 MBB) がかなり多くの回数やってのけたことだ。

観客の何人かは「何かこいつらのこと知ってるぞ……?」と思ったに違いないが、そう、その通り。Andy Nixon (Dr.&vo.) と Dan Makinna (Ba.&コーラス) は、以前、Mills 氏と共に The Jeevas として各地でツアーを行っていた。

The Jeevas が解散してから、Crispian は Kula Shaker を再結成し、Dan と Andy は Daniel Lundholm (gu.&コーラス) と共に、2005 年初旬にブライトンの海沿いの町で MBB を結成した。その後、Crispian は Kula Shaker の再結成ツアーのために、過去と現在の全バンドメンバーを招集した。Crispian が Dan と Andy にしたことは、親切だけではなく、Kula のメンバーと共に過ごし、バンド仲間を増やすことをも可能にした。



その新しいバンドでとりわけ目を引くのは、リードボーカルも取っているドラマーの Andy であることは事実だ。Andy は観客のノセ方を確実に知っている！ MBB の楽曲はカントリーやブルーススタイルを取っているが、サイケデリックロックであることもこれまでにライブで立証されている。彼らの楽曲の殆どは一緒に歌うのに最適な曲であり、一曲目から人々の顔に笑顔を引き出している。ちなみに、彼らのライブは、彼らのかつての教師にも劣らない（腕前の）ハモンド／ワーリツァー弾き、Rich Causon にサポートされている。

MBB が影響を受けたミュージシャンとしては、The Band、Creedence Clearwater Revival、The Faces、Bill Withers、Calexico、Dr. John や Jimi Hendrix 等が挙げられる。MBB はまだどことも未契約だが、自主制作の EP をリリースしており、たいていライブの後に Andy や他のメンバーが販売している。もしそれを手に入れることができるなら、聴いてみる価値がある！ CD には「Nail In My Coffin」「East Street」「Green Fingers」「Ballad Of A Broken Man」の4曲が収録されている。



UK Discography

ALBUMS

SHAKER 1MC	K	Cassette; 9/96
SHAKER 1CD	K	CD; 9/96
SHAKER 1CDK	K	CD digipak; 9/96
SHAKER 1LP	K	12" (with inner sleeve); 9/96
SHAKER 1MD	K	MiniDisc; 9/96
XPCD 806	K	Promo CD
SHAKER 2MC	Peasants, Pigs and Astronauts	Cassette; 3/99
SHAKER 2CDX	Peasants, Pigs and Astronauts	CD; 3/99
SHAKER 2LP	Peasants, Pigs and Astronauts	LP; 3/99
XPCD	Peasants, Pigs and Astronauts	Promo CD; 3/99

EPs

CK68514	Govinda/Gokula/Dance In Your Shadow/Raagy One (Waiting For Tomorrow)/ Moonshine/Troubled Mind	08/97; EP released in America
	Dictator Of The Free World/ 6ft Down/Troubadour/The Revenge Of The King	3/06; EP released on iTunes

SINGLES

KULA 71	Tattva (Lucky 13 Mix)/Hollow Man Pt 2	7"; 12/95
KULA CD	Tattva (Lucky 13 Mix)/Hollow Man Pt 2	CD; 12/95
KULA MC 2	Grateful When You're Dead – Jerry Was There/Another Life	Cassette; 4/96
KULA 72	Grateful When You're Dead – Jerry Was There/Another Life	7"; 4/96
KULA CD 2	Grateful When You're Dead – Jerry Was There/Another Life/Under the Hammer	CD; 4/96
XPCD 781	Grateful When You're Dead (edit)/ Grateful When You're Dead/Jerry Was There	Promo CD; 4/96
KULA CD 73	Tattva/Tattva on St. George's Day/Dance In Your Shadow	7"; 6/96
KULA CD 3K	Tattva on St. George's Day/Dance In Your Shadow/Red Balloon (Vishnu's Eyes) incl. Poster	CD; 6/96
KULA CD 3	Tattva/ Dance In Your Shadow/ Moonshine/ Tattva (Lucky 13 Mix)	CD; 6/96
XPCD 797	Tattva/Tattva On St. George's Day	Promo CD; 6/96
KULA 74	Hey Dude/ Troubled Mind	Jukebox 7"; 8/96
KULA CD 4K	Hey Dude/ Tattva/ Drop In the Sea/Crispian reading from the Mahabharata incl. Poster	CD; 8/96
KULA CD 4	Hey Dude/ Troubled Mind/Grateful When You're Dead (BBC Session)/ Into The Deep (BBC Session)	CD; 8/96

SINGLES (continued)

KULA MC 4 XPCD 818	Hey Dude/ Troubled Mind Hey Dude	Cassette; 8/96 Promo CD; 8/96
KULA 75	Govinda (Radio Mix)/ Gokula/Temple Of The Everlasting Light	7", limited to 5000 by mail order only; 12/96
KULA CD 5	Govinda (Radio Mix)/ Gokula/ Hey Dude (live at London Astoria)/ The Leek (credited to Bevan)	CD; 11/96
KULA CD5K	Govinda (Hari and St. George)/ Gokula/ Govinda (Monkey Mafia Pigsy's Mix)/ Govinda (Monkey Mafia's Ten To Ten)	CD incl. Poster; 11/96
KULA MC 5 XPCD 837	Govinda (Radio Session Mix)/ Gokula Govinda (Radio Mix)	Cassette; 11/96 Promo CD; 11/96
XPR 2324	Govinda (Monkey Mafia Pigsy's Mix)/ Govinda Monkey Mafia's Ten To Ten	Promo Vinyl 12"; 11/96
KULA MC 5 KULA CD 6	Hush/Raagy One Hush/Raagy One/Knight On The Town (live at London Astoria), Smart Dogs (Live at London Astoria	Cassette; 11/96 CD; 2/97
KULA CD 6K	Hush/Raagy One/Unter The Hammer (Hold On To The Magical Key)/Govinda (live in Plymouth, 26.1.97)	CD incl. Poster 2/97
KULA 76	Hush	7"; 2/97 (re-released 7/97)
KULA 21 MC KULA 21CDX	Sound Of Drums/Hurry on Sundown (Hari Om Sundown) Sound Of Drums (Radio Edit)/ Hurry On Sundown (Hari Om Sundown)/ The One That Got Away/Smile	Cassette; 4/98 CD incl. Poster; 4/98
KULA 21CD	Sound Of Drums (Album Version)/Hurry On Sundown (Hari Om Sundown)/ Reflections Of Love/Fairyland (feat. Don Pecker)	CD; 4/98
XPCD	Sound Of Drums	Promo CD; 4/98
KULA 22MC KULA 22CD KULA CDX XPCD 1088	Mystical Machine Gun/Guitar Man Mystical Machine Gun/ Guitar Man/ Prancing Bride Mystical Machine Gun/ Avalonia/ Holy River Mystical Machine Gun/ MMG No. 2	Cassette; 2/99 CD; 2/99 CD; 2/99 Promo CD; 2/99
KULA 23 MC KULA 23CDX	Shower Your Love/ Goodbye Tin Terriers Shower Your Love/ The Dancing Flea/ Light Of The Day incl. 4 Postcards	Cassette; 5/99 CD; 5/99
KULA 23 CD	Shower Your Love/ Goodbye Tin Terriers/ Sound Of Drums (live Radio 1 session)	CD; 5/99
XPCD 1118	Shower Your Love	Promo CD; 5/99

PAUL'S DRUMKIT

このコーナーでは、Kula Shakerのメンバーが使用している機材を徹底解明しましょう。今号は、Paulのドラムキットについてご紹介します。

INTERVIEW PART 1

(4/12 ロンドン、キングス・カレッジの外で)



Kula Shakerは90年代を代表するバンドのひとつで、デビューアルバムはOasis『Definitely Maybe』以来の初動売上枚数を記録し、ライブのチケットはいたるところで完売となった。プロモーションビデオはすべての音楽チャンネルで放送され、ラジオではOasis等のビッグネームの楽曲を隔へと追いやった。しかし、2ndアルバム『Peasant, Pigs & Astronauts』リリース後、一転して彼らは落ち目となってしまった。そしてある日、Crispianが脱退を決意し、Kula Shakerは終わりを告げた。残念なことに、イギリスの音楽シーンはすばらしいバンドを失ってしまった。私やたくさんのファンたちは、もう彼らのライブに足を運ぶことができないのだ。

しかし、6年の年月と様々なプロジェクトを経て、Kula Shakerは再結成され、ダウンロード販売のみでのEPが発売された。それはダウンロードチャートTOP10入りを果たし、イギリスの小さなライブバーで行われたウォームアップツアーのチケットは軒並みソールドアウトとなった。その

ウォームアップツアー第1弾の最終日、ロンドンのキングス・カレッジで、私は初めてKula Shakerのライブを見ることとなる。そして、私にとって素晴らしいドラマーの一人であるPaul Winterheart氏に話を聞くことができた。

私がドラムを始めた主なきっかけは、『K』でのPaulの演奏を聞いたことだった。「皆そう言ってくれるけど、感謝はしてくれてないみたい(笑)」とPaul。彼の演奏スタイルは今もなおシンプルで、「Hey Dude」「Govinda」や「Mystical Machine Gun」などに代表されるリズムはAlonzaと共に健在である。さて、何が彼をそうさせているのか、どんな楽器を使って夢を実現させたのか、うかがっていきましょう。

まずはお決まりの挨拶を交わし、記念撮影をし、私と同行したAndrea、そしてSebastianは長時間Paulに話を聞くことが出来た。Black Rebel Motorcycle Clubの話題や(「僕の奥さんは彼らの大ファンなんだよ(Paul)」)、LAのバンドJane's Addictionのドラマー、Stephen Perkinsに会ったときの面白い逸話も披露してくれた。(ここから先は一語一句の記憶が確かでないので、Paulが話したことの要点をまとめて書くこととする。)

「LAでレコーディングしていたとき、Stephenのテクニシャンが、おい、Stephen Perkinsに会いたいかい? と言ってきたから、もちろんと答えたら、彼は一見地味な家に連れて行ってくれたんだ。庭に入っていくと奥の方に小屋があって、中にはドラムが3セットと、パーカッションが並んでた。それでも十分なスペースがあったよ。とにかく、彼らが狂ったリズムを演ってる間、オレはハイになってドラムに向かってただリズムを取ろうとしただけで終わっちゃったんだ」(Paul)

とても楽しいお話でしたね。

Sebastianが「もしよかったらサウンドチェックを見学させてもらえませんか?」と尋ねてみると、「追い出されてしまうかもしれないけど、一緒に来てもらっても構わないよ」とPaul。



INTERVIEW PART2

(キングス・カレッジ内で)

私たちはやや平凡な面持ちのキングス・カレッジ学生会館内のバーに腰掛け、自分たちの幸運を未だに信じられずにいた。一度Paulは自分のドラムをセットしに行き、戻って来ると愛想よく談笑し始めた。私が彼のドラムについて質問をすると、「近くに行って見てみるかい?」、私の答えはもちろんお分かりだろう。

Paulのドラムセットは写真やテレビでよく目にされているが、彼は“low profile”という70年代製のSlingerlandのドラムセットを好んで使用している(他にも、黒いPearlの“export”を99年のPukklepop Festivalで使用)。しかし、これはラ

イブでの使用が主だという。「これはレコーディングではめったに使わないね。小さめのGretschのセットを数曲のレコーディングで使ったよ」

この“low profile”はよく使い込まれていて、そして今なお見事な音色を出す。22インチのバスドラ、13インチのラックタムはスネアスタンドに乘せられ、16インチのフロアタムと14インチのLudwigスネアで成り立っている。シンバルは全てPaisteで、14インチハイハット、16、18インチのクラッシュ、20インチのライドを使用していた。「もうひとつクラッシュは持っているんだけど、今はそれが唯一のスペアなんだ」。シンバルスタンドはYAMAHAのミクスチャー、ペダルはLudwigのSpeed King。

TME: 以前はもっと低くセッティングされていたと思うのですが。

Paul: うん、低く組み過ぎて右の大腿部が打撲傷になってたんだ、というのもライドをものすごく激しく叩いていたからね。バンドが解散した後、生まれて初めてドラムのレッスンを受けたんだけど、そのとき先生に全部ちょっとずつ上げるように言われたんだ。その方が僕のプレイに合っていたんだ。

この時 Simon がステージのセッティングを始めたので、それを私たちは、ひどく腹を立てる前に行け、という合図として受け取った。

INTERVIEW PART3

キングス・カレッジ内、窓際のテーブルにて

TME: 今、専属のドラムテクニシャンがいないようですが、探しているところなのでしょうか？

Paul: いや、楽器についてはあまり問題ないんだよ。99 年からずっといなかったし、いなくても大丈夫だよ。

TME: 皆が知りたがっていることですが、バンドが解散してから今回の再結成までの間、何をしていたんですか？

Paul: 僕と Alonza は長い間同じ通り沿いに住んでいたりで、一緒に Aqualang の仕事をしたり、バンドを組んでカムデンで演奏したりしていたよ。

TME: ドラムの先生をやっていたとどこかで読んだのですが…。

Paul: いや、本格的に先生をやっていたんじゃないんだよ。ただ子供たちに、ドラムのリズムの上で何か演奏してごらんって言っていただけなんだ。

TME: それは楽しそうですね！ところで、ヨーロッパツアーの予定はあるのでしょうか？（一緒にいる Andrea はこの質問の答えに神経を集中させている。なぜなら彼女はドイツに住んでいるから!）

Paul: うーん、そのうち分かるかな。うまくいけば、秋にヨーロッパツアーに出たいね。でも今はレコード会社との契約もないし、なんとも言えないな。

ここで Crispian と Alonza が到着、Paul との時間は終了した。私たちは Kula のサウンドチェックを見学（途中、Crispian は PA の Graham に怒ったりもしていたが）、The Magic Bullet Band のセッティングからサウンドチェックも見学させてもらった。偶然にも、MBB のリードボーカルでドラマー、Jeevas のメンバーでもあった Andy も Paul と同じセットアップだったようだ。Paul はクルーたちとステージを離れる前にこちらに戻って来て、私たちと握手をした。「会えてうれしかったよ。これから食事に行くんだ。君たち追い出されてしまうかもしれないけど、チケットを持っているなら大丈夫だね。じゃあまた。今夜のライブ楽しんでね」。私たちはこのグレートなドラマーが部屋から出て行くのを見送った。何という男だ。

KOOL SET-UP

DRUMS

1970's SLINGERLAND KIT:

14" Snare

13" Rack tom (mounted on snare stand)

16" Floor tom

CYMBALS

PAISTE:

16, 18" Crashes

20" Ride

HARDWARE

Mixture of YAMAHA and Ludwig

Vic Firth 5b Sticks

With Crispian, Alonza & Paul

APRIL/MAY 2006

ウォームアップツアーの最終日、私はついにPaulとShep (Alonza) を捕まえて、インタビューをすることに成功した。今回のインタビュー記事は短くなってしまってお詫びしますが、次号では完全版をお届けする予定です（お約束します）。

ALONZA

Strange Folk: ベースプレイヤーとして、今まで演奏してきた中でベストだと思う曲は何ですか？

Alonza: うーん、わからないなあ、でも新曲の中だったら、「6ft Down」のレコーディングは楽しかったな。大きなファズペダルを使ったんだよ。

SF: あなたがとてもフォークソングにハマっていると聞いたのですが、どんなものが好きなんですか？

Alonza: 世間一般には通用していないけど、*Witch Seasonレーベルの作品は好きだね。（※編者注：60年代後期の草分け、70年代初期のフォーク・アコースティックレーベル。アメリカ人のJoe Boydが立ち上げた、とても収集価値のあるレーベルである）Nick Drakeとか、Bert Janschとか。手回しオルガンとシタールを使っている初期の曲も好きだよ！

SF: Kulaのファンについては、どう思いますか？

Alonza: いろんな人達がいる、いつも驚かされるよ。年配のヒッピーから、若いミュージシャンまでだからね。彼らには同じ熱狂する傾向があるように見えるね。

SF: 再結成後のベストギグはいつのギグでしたか？

Alonza: ミルトン・キーンズは興奮したよ。この6年で初の正式な僕らのギグだったからね。

SF: ニラネギ (Leek) はまだ好物ですか？

Alonza: うん、妻が作るニラネギのパイはすごくおいしいよ！



SF: どのくらいベジタリアンを続けているのですか？

Alonza: 18年くらい。

Paul

SF: デヴォン（イギリスの南西部）でレンタカーを横転させたというのは本当ですか？

Paul: 本当だよ。

SF: あなたはかつてLittle Featのファンだったと聞いたことがあるのですが、まだファンなのですか？

Paul: ああ、Andy (Magic Bullet Band) がどのアルバムがオススメか聞いてきたから、『Dixie Chicken』って答えたんだけど、Alonzaがそれは駄作だって言うんだよ。僕は全作好きだったんだけど、今は彼らもコカインでダメになってしまったと思うよ。

SF: あなたが持っているアルバムの中で一番だと思えるのは何ですか？

Paul: 『Best of Lee Dorsey』、Pink Floydの『Wish You Were Here』、Rage Against the Machineの1枚目。

SF: 前回のメジャーのレコード会社（コロムビア）との契約は悲惨だったのだと思いますが、最初どのようにして見つけたのですか？

Paul: まず Regent's ストリートを右に行って、Oxford Circusの手前、Marlborough ストリート10番。アハハ！

SF: 一番誇りに思うKulaの曲は？

Paul: 「Ballad of a thin Man」

SF: Kulaのファンをどう思いますか？

Paul: すごく多種多様だね。まったく狂ってるよ！ おもしろい！

SF: この2回のミニツアーで、一番良かったと思うギグはどこでのギグでしたか？

Paul: Glasgow ABCでのギグ。

SF: Kulaファンの大部分はあなたが影響を受けたものを知らないと思います。どんなミュージシャンから刺激を受けましたか？

Paul: Lee Dorsey、Jackie Liebezzeit、Bill Bruford、Josh Freese、Andy Newmark、Tom Morello、Rebirth Brass Band (New Orleans)、The Metres、Barry White、Bill Withers、Fleetwood Mac、そしてNeil Young。

SF: 遺産となるような楽器は持っていますか？

Paul: 僕のシルバーのドラムセットの半分は、The SmithsのMike Joyceが持っているんだよ！

SF: Shep (Alonzaと組んでいたバンド) ではどんな活動をしていたのでしょうか？ 楽しかったですか？

Paul: 何回かギグをやったり、Alonzaはスタジオでも良い演奏だった。僕のループでもね。新しいバンドでスタジオに入ると大変なことになる場合があるんだけどね。



SF: レコードかCD、どちらを買いますか？

Paul: 最近はどうちも買わないよ。また使い捨てのお金が入って来たら、両方買うよ。

SF: 言うまでもなく、Kulaは神秘主義のバンドですよ。それはあなたの個人的な信仰とは結びつきますか？

Paul: 教祖はコカインを好むかい？（※注：どんなシャレなのか分からないため直訳してあります）

SF: 好物の野菜は何ですか？（失礼、カブトムシに宛てたような質問でしたね）

Paul: ナス！

SF: では最後ですがおそろかにできない質問を。どのくらいベジタリアンを続けているのですか？

Paul: 11年。

CRISPIAN

SF: Kula Shakerはいまだに神秘主義のバンドだと言えますか？

Crispian: 人生は神秘的、神秘か死か。

SF: ニューアルバムは年内リリースだそうです、インド調の曲を期待して良いのでしょうか？

Crispian: うん、多分。『School of Braja』（※注：Kula と Jeevas 参加のチャリティーアルバム）用で随分録音したよ。これは2ヶ月後くらいには皆に聞いてもらえると思う。

SF: どうやってHarryをベジタリアン志向に転換させるつもりですか？

Crispian: ゆっくりと、確実に。

SF: Harryのフルネームを教えてください。

Crispian: Henry Broadbent Bowers。

彼はthe Killermertesというバンドのメンバーだったんだけど、とても気に入ったから連れ去って来たんだ。クロロフォルムとかを使ってね。

SF: 私達は「Strange Folk」のフルバージョンをいつか聞くことはできるのでしょうか？

Crispian: うーん、分かんないな。

SF: 今回のツアーのチケットはほとんど売り切れですね。もっと大きな会場でのライブは考えているのでしょうか？

Crispian: じきにね。でも大事なのは良いライブをすることで、大勢の前でやることじゃないから。僕らは今回のツアーは長いキャンペーンだと思ってる。Tardis（※注：イギリスのテレビ番組「Doctor Who」に出て来るタイム・マシン）みたいにだんだん大きくなるけど、夏フェスの会場も広いし！

SF: Jayはどうしたんですか？ 色々な「Footballers Wives」的な噂が出回っていますが。

Crispian: ノーコメント。

SF: ニューアルバムのタイトル案はすでにいくつかあるのでしょうか？



Crispian: うん。でも今君に言ってしまったら、僕は君を殺さなくちゃいけなくなっちゃうよ！

SF: 『Revenge of the King』のアートワークは誰によるものですか？

Crispian: 異父妹のCarlyがジャケットを作ってくれたんだ。彼女はアニメーターなんだよ。ロゴは、サンタクルーズ諸島出身で、改造自動車フリークのSudarshanが作ってくれたよ。

SF: 「Dictator of the Free World」のラフバージョンがリリース前にネット上に流出しましたよね。バンドの一員として、どう思いましたか？

Crispian: Lars Ulrich（Metallica）が見つけたんだから、不満は言えないよ。

SF: ライブで演奏するのが一番好きな曲は何ですか？

Crispian: 「Die For Love」「Govinda」

Alonza: 「6ft Down」

Paul: 「6ft Down」

Harry: 「Die For Love」「Hey Dude」

SF: もう二度と演奏しないであろうKulaの曲は？

Crispian: 「Psychedelic Gangster」という古い曲。
すごく長い上にまったく意味がないんだ。

SF: “Winged Boy” はどうなっているのですか？

(※注: Crispianが脚本を手掛けている映画)

Crispian: ハリウッドのたくさんの会計士に汚されているよ。
お金のかかる脚本を書いちゃった僕のせいなんだ、その映画を撮るのにもっと費用がかかるんだよ。コントロールが効かない脚本家が書き終えた結果さ。この夏にニュージーランドで撮影だって言ってたな。設定はアイルランドだとしてもね。

SF: あなたはKulaからJeevasまでの間に、アルバム3枚(πとの1枚、アコースティックアルバムと、もう1枚のソロ作)を制作されたそうですが、それらはリリースされないのでしょうか？

Crispian: するつもりはないね。

SF: 『School of Braja』は今年の上旬にリリースということでしたが、もうその時期は過ぎてしまいました。実際にはいつごろリリースなのでしょうか？

Crispian: 今プレスしているところなんだ。ライブ会場やオンライン通販、amazonなどで売り出す予定だよ。

(SF: あまり信用出来ない)

(※注: 2006年10月現在、www.keymailorder.comにてオンライン販売中)

SF: The Kaysは何枚かシングルを出していますが、どうやったら手に入れますか？

Crispian: もう一度、ノーコメント。

SF: Kulaのアルバムすべてに隠しトラックが収録されていますが、次回作にも入る予定はあるのでしょうか？

Crispian: それを言うには少し早過ぎるな。

SF: あなたたちはラッキーナンバーを持っているみたいですが(復活最初のライブの日付は11日でした) アンラッキーな数字はあるのでしょうか？

Crispian: 8は死を意味する数字。でも麻薬でバリってる時だったら死だって前向きなことかもね！

SF: あなたたちはSt. Georgeに夢中になっていますが、評判によると、St. Georgeは西暦303年に殺されたようです。これは「303」に関係しているのでしょうか？それともまったく関係ないのですか？

Crispian: すべては繋がっているんだ。アインシュタインは僕を支持してくれるよ！

SF: ステージ上でNag Champaというお香をよく焚いているようですが、これはあなたの好みですか？

Crispian: うん。「ベスト・クウォリティー」(インドなまりで)

SF: 「Revenge of the King」はMedieval Baebes(Alonzaの奥様が在籍のヴォーカルグループ)との合作だと聞いたのですが、どのように実現したのですか？

Crispian: 合作じゃないよ。あの曲はAlonzaと僕とで書いたんだ。

SF: 私の情報源によると、Don Pecker氏があなたにゴルフを教えているようですね。バンドで遊びでやっているのですか？ それともかなり本格的なのでしょうか？

Crispian: それは秘密！

SF: 最後に、今、Kula Shakerは生まれ変わりました。これから私たちはどんな狂気を期待できるのでしょうか？

Crispian: 世界中狂っているけど、僕らは正気だよ！
アルバム、たくさんのライブと、ハリケーンを起こすこと。



Karma Comedian

Guess who's lightened up? Chastened by all those retro Nazi posho jibes and baffled by his non-trendy Belgian fanbase, *Kula Shaker*'s Crispian Mills is on the fast train to Rehabilitation Central with a mental new album in the guard's van. "We're so open for piss-taking," he tells Tom Doyle.

Grey-becked, middle-aged furry freaks peer stagewards through greasy locks and granny specs, nodding rhythmically. Crap dancing twentysomething "straights" throw pointy-fingered shapes in hellish, synchronised routines. One crisp-shirted, expensive rain-coat-wearing businessman and Michael Douglas lookalike, burning like a beacon of staff-arsed awkwardness in the midst of the throng, cannot tear the permanent grin from his face. Onstage, *Kula Shaker* strike the final chord of Hey Dude and Crispian Mills stares out into the audience with a look of barely disguised incredulity.

As the post-song whoop goes up, he enquires, in his best Brixton Bowie, "You enjoy that then?"

Welcome to Friday night in Brussels. Outside in the grey, deserted streets of the somehow soulless appointed capital of a united Europe, light drizzle conspires with piercing wind to complete a grim picture. Inside La Botanique, the city's former botanical gardens-turned-arts-hub, the sound of *Kula Shaker* reverberates around the high-roofed dome that is the unorthodox setting – part tiered lecture theatre, part mini-Albert Hall – for this last date on their European warm-up club tour.

As the band roll through their 13-song set, confirming their reputation as a blistering live act, the motley crowd assembled here collectively serve to underline another point. One million copies of debut album *K* later, and with every likelihood that its grandly-titled follow-up, *Peasants Pigs & Astronauts*, might

follow suit, there appears to be no such creature as your average *Kula Shaker* fan.

Later, Mills will claim that, from his perspective, tonight's audience appeared to consist of "ten people down the front doing Jane Fonda's workout video and three hundred behind them with their arms folded". Still, he visibly shudders, that was nothing compared to Leeds, where a dominating beer-boy presence vocally interpreted Govinda as a curry house anthem. "I could hardly sing the song," the frontman recalls, wide-eyed. "I was looking at them, thinking, What the fuck is this all about?"

If the typical *Kula Shaker* devotee cannot be easily identified, then the *Kula Shaker* hater is easier. Not in recent memory has a group polarised the listening public to such extremes. The detractor argument goes that the strappy-strided outfit are, variously: unfeasibly retro; too posh to rock; peddling half-cocked spiritual dogma; possibly Nazi. In the converted, they are bona fide successors to the merry prankster tradition, clearly possessed of a deeper wisdom than, say, Oasis and purveyors of fine pop-flavoured psychedelic rock.

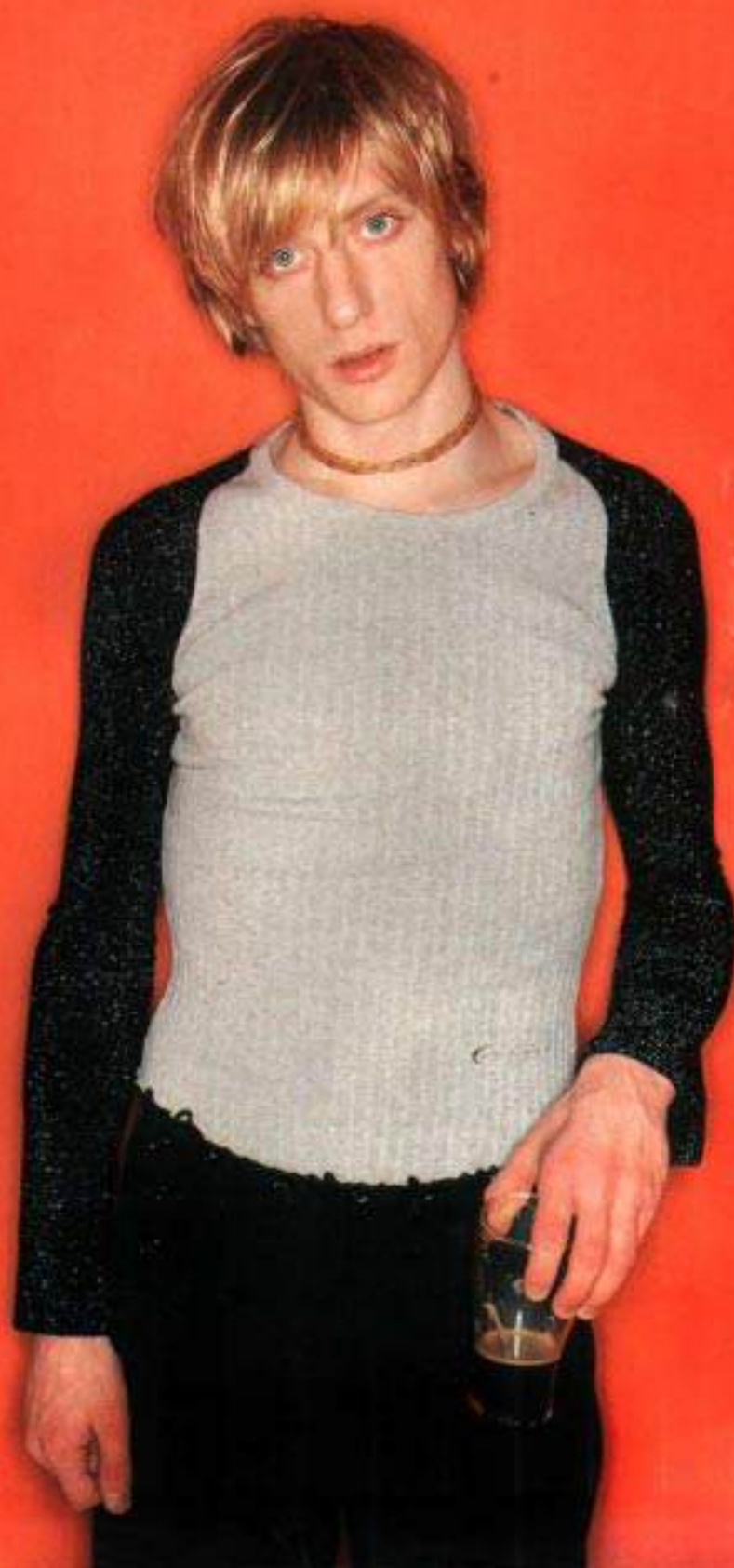
Onstage tonight, Crispian Mills cranes his neck skywards to take in the full scale of La Botanique's dome and, for no clear reason, says, "I'm expecting this place to fill up with water at any minute..."

In the unlikely event, there's a few here who'd volunteer to form a human life raft to spare the members of *Kula Shaker* from a watery death. Elsewhere, there's an equal number who would gladly turn on the tap.

LEO

Photographs
by Pat Pope

Crispin Mills, Light Zoo
Studios, Edgware Rd,
London, February 6, 1999.



"I grew up with pictures
of my mum standing
with John Wayne or
Walt Disney. That did
something to my head."

Crispin Mills on actress Heather Royce

Kula Shaker

FOUR DAYS LATER, Crispian Mills receives Q in the London home of his manager. As he sits tea in the kitchen, the occasional cat skittering past his feet, he searches for words to sum up the mood his band were in at the close of K's hugely successful campaign, when Kula Shaker were banded into a remote cottage on the Devon/ Cornwall borders to contemplate its successor.

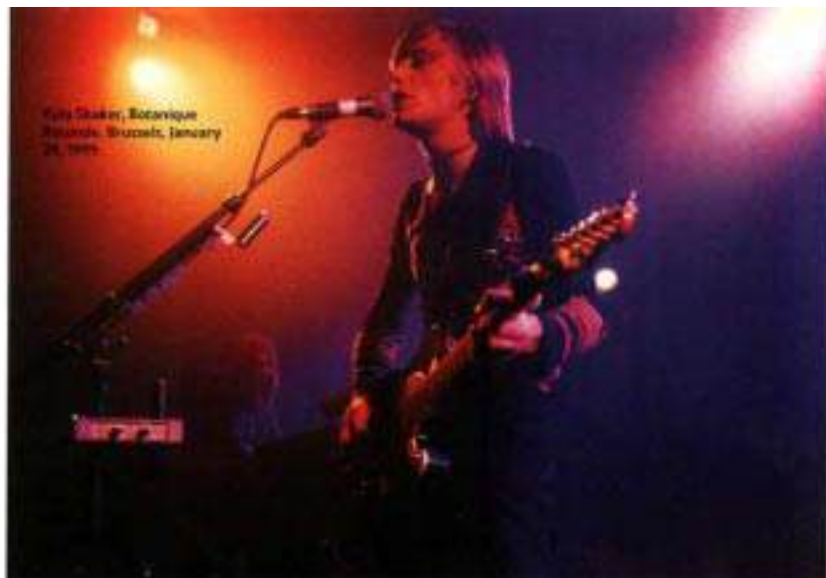
Aside from the more pleasurable perks of Kula Shaker's rocket-fuelled ascent, there was a looming legal battle with their former manager to contend with (settled with "a substantial amount"), not to mention the media scars inflicted by Mills's comment in an interview that "Hider knew a lot more than he made out". The wording was ill-chosen, though the singer claims he was only trying to point out the hijacking of the swastika, an Indian mystic symbol of ancient vintage.

"By the end," Mills sighs, "what with litigation, media and record companies and the whole big mental second album syndrome bullshit trip, we had our fair share to deal with. I think we were all pretty tired and a bit philosophical. Tell you the truth, we weren't answering the phone much."

Fittingly, this morning in the first week of February, the British public are howling for the blood of Glenn Hoddle, following the pigeon-blooded pronouncements that will eventually lead to his sacking. Surely Mills must feel some measure of empathy?

"Well... I don't know what he said, y'know," he offers, carefully. "I wouldn't believe he said it for word what they said he did... but it sounds a bit hardcore. Whatever he believes, he isn't putting it across the right way. I think with a lot of this New Age-spiritual stuff, people get into really ancient esoteric subjects and they're just not mature enough to be able to communicate it. I'm sure I've been guilty of that."

Did you worry that your comment might have snuffed out the band's career?



"Uh... yeah. There were some people around me who did. It's whether you want to listen to them or not."

The arch irony of the soundbite blunder was that – of all people – Crispian Mills really should have known better. As the grandson of Sir John and son of Hayley, Mills enjoyed a rare grounding in how best to negotiate the slippery rungs of fame. This, he agrees, compounded the agony for him.

"I thought I'd be more comfortable with it," he acknowledges. "Obviously I couldn't read when I was two, but with my parents splitting up and then my step-parents and the shit reviews, I've seen family and friends go through it. I didn't have some horrible malignant concept of the media. But



"DID I REALLY SAY THAT?" THE WISDOM OF CRISPIAN MILLS

1 Time

"Time is an element, a very subtle element. It's like if you drop a pebble in very smooth water, you get very clear ripples."

2 King Arthur

"Arthur represents man being empowered by a higher energy, a divine energy, a spiritual energy... with Merlin representing magical intervention and power coming from the Mother Figure."

3 Cosmology

"There are other universes besides this one. You know when you're a kid and you get into the idea of being an alien on a giant's toilet? It's as bad as you might imagine."

4 Tantric Sex

"Kundalini is this mud fluid that emanates at the base of the spine, and when you're withholding orgasm, you're reversing the kundalini and semen. You send it up the spine into your brain."

5 Darwinism

"We're all gurgling in the pea soup of existence, it all happened out of nothing and we're just a bunch of naked monkeys. That's just a theory but it's not taught like one."

You silly, silly man.



certainly I'd had more of a hands-on experience of it."

Still, the incident doesn't appear to have quashed the 26-year-old frontman's confidence. Where you'd expect him to be more guarded than ever, he's keen to look for the key to his complicated public life in his famous family past.

"I grew up with pictures of my mum looking very young, standing with John Wayne or Walt Disney," he says. "That did something to my head. I thought that that was kind of normal. That's what happens – once you get to twelve, you start making movies. It was only when I got to twelve that I realised that, obviously, that wasn't the case."

"Sometimes it's a bit too abstract for me to be

objective about fame" came I did grow up with it. But at the same time I was aware it wasn't like being the son of John Lennon or the son of Kennedy or someone. It was quite a quiet scene. But then once they start associating you with it, then they associate you with the Mills... thing."

THE "MILLS THING" resurfaced in the tabloids recently when "Hayley toyboy" Marcus Maclaine turned up, eager to stir the ordure and remind anyone who cared to listen that Kula Shaker (previously Objects Of Desire) had once been his band, and Mills, Winterhart and Bevan his protégés. Amid shag-and-tell revelations concerning Crispian's mum, hippie adventurer Maclaine recalled how Sir John had thrown bread rolls at him in a restaurant and alleged that Crispian, initially happy to accept the guitar lessons and the spiritual guidance, turned hateful. In no uncertain terms, he accused Mills of hijacking the band and wrecking his relationship with Mills's mère.

Phew. Having a go at Crispian Mills could be declared the national sport. On top of everything else, there's the common assumption that he was somehow banded – as a Bird's Eye advertising campaign once put it – success on a plate.

"Oh yeah," he nods. "They think I was a bit of a

Kula Shaker

"I like, Mummy, get me a record deal now. If only it was that easy. One German interviewer once asked Jay if he thought Kula Shaker had only made it because of Crispian's famous mother. He said, 'Yeah, of course, she bought all the albums.'

"But," he continues, more soberly, "I knew the media shitstorm was inevitable from the moment we got a record deal. I knew what the band was like and... we're so open for piss-taking."

ONE BY ONE, the other three-quarters of Kula Shaker gradually shuffle in. First Jay Darlington, Hammond wizard and the most sarcastically "experimental" member, followed by tall, reasonably posh bassist Alonza Bevan and then frighteningly posh drummer Paul Winterhart (the only Shaker, they later claim, to have attended a comprehensive school). An affable, relatively unpretentious bunch, it becomes clear that there is little you could throw at them that they haven't learned to deflect with the shield of self-deprecation.

Moreover, certain preconceptions about the group appear unfounded. Mills dithers when the subject of meditation is raised, along the lines of it



Kula Shaker (from left): Crispian Mills, Jay Darlington, Paul Winterhart, Alonza Bevan, Alonza Bevan.

"Oh, we're quite aware of what year it is... It's 1968, isn't it?"

Kula Shaker's Jay Darlington

"really being about how you are with someone and how you interact and what you're driven by", before admitting with a Murtley snigger that, no, he doesn't meditate. No big-time drug dabbler either, he hasn't "dosed" acid in three years and can barely function if he smokes a spliff.

"I was interested in acid because I associated it in a pop music way with what was a counter-culture," he reasons. "It didn't take long for me to realise that the drug movement now is just part of the culture, not the counter-culture. I remember meeting this guy from Hounslow when I was about eighteen and everyone was talking about E. He was saying, 'Yeah, you've got to have a fucking fight on it, man, seriously. I said, 'Wait, I thought it's all about love when you're on E. He said, 'Yeah, you have a fight and you fucking love it.'"

Kula Shaker as a band are far more eager to stick out than blend in. Eagles member-manqué Jay Darlington looks like he's been dragged through Oxford backwards but insists, "No... it was forwards," and warns that his walrus moustache "might come back... I'm finding the look that has the piss ripped out of me the most and I'm going to stick with it." Two days later, he'd shaved it off.

Musically, Kula Shaker's intentions are just as flighty and brazenly OTT. For Primitives Pigs & Astronauts, they've coaxed '70s production icon Bob Ezrin (Pink Floyd, Alice Cooper, Lou Reed) out of retirement in their hankering for days when, as Mills puts it, "the album was a story-telling art-form". The group realised that Ezrin was the ideal candidate for the job "when he said that he liked what we'd tried to do on K. We agreed... so many things are fucked about it."

This new, extra-amiable Kula Shaker even fail to bridle when Q suggests that the album's pile-

driving S.O.S. (Spawn Of Satan) has a whiff of the '70s rock musical ("Yeah," Mills concedes. "It is a bit Hair"). In fact, only one issue really gets their backs up: the inverted snobbery they feel is rife within rock music circles.

"There's a heavy censorship on what's acceptable and not acceptable to be a pop person," Mills argues. "It's like, I'm sorry, if you come from that background, you're not allowed to sing in Sanskrit. Some of the criticism we got I thought was quite totalitarian. It's all about families and the class system. You know, you've got to judge people on how they act and how they are."

"I think as long as you make good music and you're being honest," Darlington adds, "what more can you ask for? It's like the public school punk rock thing - Shame MacGowan and Joe Strummer - I mean, who were they kidding?"

Has there been anything said about Kula Shaker that really hurt?

"Yeah," beams Darlington. "Your mum smells."

Bevan chips in, dryly: "You should be able to kill a man for that."

WHILE DARLINGTON AND Mills represent the drug-free element of Kula Shaker, Bevan and Winterhart are the epitome of the nice-but-bumblingly perma-stoned rhythm section. Winterhart recounts an occasion in LA where he was invited by the drummer of Jane's Addiction for a jam and ended up so herbally incapacitated that he couldn't even pick up his sticks.

Together the drummer and bassist embarked on a visit to India in the brief holiday time afforded the group and quite literally found themselves up shit creek without a paddle. In a mood for unguided exploration in the middle of a boat trip, they faked Delhi belly, made the vessel take a pitstop and, once on the shore, legged it into the jungle.

"We had to walk ten miles around this lake to get back," the bassist grins. "Then we got up this

mountain to try and check our bearings and, of course, an electrical storm starts coming in and we're at the highest point around."

"Alonza was screaming actually," the drummer offers.

"Oh yeah, I was," Bevan continues, unfazed. "We ended up getting down and finding a stream that would take us back to the lake. We were both wading around, covered in leeches."

Mills, of course, is an old stager when it comes to the subcontinent.

"When I first came back from India," he remembers, "I was 20, and I met this guy on the platform at Kentish Town tube. He clocked me wearing these turti beads that you can only really get there and said, 'You been in India? This guy was really pissed-up and it was like, 'How long were you out there for? I said, 'Ten weeks, and he was like, 'That's fuck all, mate. I was there for five years. I got sent back for dealing fucking awake.'"

KULA SHAKER HAVE a developed sense of their own ridiculousness. Which perhaps is just as well. "There's always one of us there to make sure it's noted whenever a Spinal Tap moment occurs," they insist.

For the record, then, in the States, they once bumped into a lofty, disinterested Metallica, in town to play the local enormodome, in a hotel lobby ("Couldn't fucking believe we were reliving that classic Tap moment"); yes, they have played Cleveland and uttered the immortal words, and yes, they have been forced to blow out a gig in Boston ("Still, not a big college town"), although to date, lacking a multi-instrumentalist, they have not yet been forced to bag mandolin strings in Milwaukee on a Monday night.

To those whose cages they rattle, the keyboardist directs this message: "It's sort of flattering that we really get up your noses... we know we're on the right track."

Kula Shaker, then. No sleep 'til 1970. "Oh, we're quite aware of what year it is," Darlington insists. "It's 1968, isn't it?"

